

## 【資料紹介】

### 受験雑誌に見る草創期の横浜専門学校

—『受験と学生』（研究社）から—

池原 治

横浜専門学校（神奈川大学の前身校）の草創期の資料は、創立から八十余年を経て愈々蒐集が困難となっている。現在、学内に保存されている当時の資料には学籍簿、会議録（部分的）、『横専学報』（学生新聞）や寄贈資料（教科書、ノート等）などがあるが、残念

ながら創立者や創立関係者の記録は乏しい。また、国立公文書館は行政機関等から移管された公文書が保存されているが、横浜専門学校にかかる各種の申請書類等も文部省公文書として所蔵している。『神奈川大学史資料集』第七集から第九集に「国立公文書館所蔵横浜専門学校資料（一）」（三）として収録した資料群は、同館により公開された公文書の複写物を翻刻したものである。

これらの資料は、何れも広い意味での学内資料と言えるものであり、外部からの視点を持つものとはいえ

ないのではないか。その意味で草創期の横浜専門学校状況を多面的に知るための情報として、新聞やここで紹介する受験雑誌などに掲載された記事は、貴重な資料であるといえよう。

『受験と学生』は、大正中期にすすめられた高等教育機関の拡充と同時期の一九一八（大正七）年に、大学、高等学校、専門学校等の高等教育機関に進学を希望する受験生に向けて研究社により創刊されたが、後に紹介するように入学試験対策に加えて各種の受験情報で構成された総合的な受験情報誌の性格を持っている。同誌はその後、『高校英語研究』と改題し、一九九七（平成九）年まで刊行された。ほかに当時の受験雑誌として『受験旬報』（後に、『螢雪時代』と改題）が歐文社（後に旺文社と社名変更）により一九三二（昭和七）年に創刊されているが、当時は通信添削を

主としていたため『受験と学生』とは雑誌の性格が異なる。

『受験と学生』が創刊された大正中期は、ヨーロッパを主戦場とした第一次世界大戦の影響による好景気に沸いていた。また、後に大正デモクラシーと呼ばれる風潮は教育熱の高まりをもたらした。このような経済的・社会的背景から高等教育機関への進学希望者は一層、増加した。さらに産業界からの要求にも応えるものとして臨時教育会議（内閣直属の諮問機関）は一九一八（大正七）年六月、大学教育及び専門教育の改善に関して答申した。早くも同年十二月には、それまでの「帝国大学令」に加えて、公立大学、私立大学を認めることになった「大学令」が公布された（それまでも「大学」の名称を認可された私立の高等教育機関があったが、それらは専門学校令に基づくものだった）。以降、大正から昭和にかけて、わが国の高等教育諸学校の拡充が大きくすすむことになる。なお、このとき専門学校令の改正は行われていない。これは、先に述べた臨時教育会議の答申において「現行制度変更の必要なし」とされたためである。

高等教育機関の拡張計画前とそれ以降の高等学校、専門学校、大学の学校数、学生数を纏めたものが表1である。大学令等の制定後、高等教育諸学校の学校数、学生数は大きく増加している。一九一八（大正七）年から一九三三（昭和八）年までの推移をみると、大学では、五校から四五校と大幅に増加している。増加した四十六大学の内訳は官立大学等十三校、公立大学二校、私立大学二十五校である。

また、専門学校も前述の拡張計画により、九六校から一七一校と大幅に増加するなど量的拡充がなされた。

横浜専門学校は、高等教育機関拡張期の一九二八（昭和三）年に横浜学院として創設され、翌年、横浜専門学校として認可を受けた新進の高等教育機関であった。当時の学生募集広告には、入学試験場として、仙台、名古屋、京都、大阪、広島、福岡及び本校（横浜）を記載している。「多数の志願者から優良な者を選抜する方針を採っている」横浜専門学校として受験情報誌は、新聞広告とともに特に地方において重要な広告媒体であったと考えられる。

(表1) 学校種別 学校数 在学者数

高等学校	(学校数)	(在学者数)
一九一八(大正七)年	八校	六、七九二人
一九二三(大正十二)年	二五校	一三、七三四人
一九二八(昭和 三)年	三二校	一九、六三二人
一九三三(昭和 八)年	三二校	二〇、三〇〇人
専門学校	(学校数)	(在学者数)
一九一八(大正七)年	九六校	四九、三四八人
一九二三(大正十二)年	一二校	五四、二三三人
一九二八(昭和 三)年	一五三校	八四、七五一人
一九三三(昭和 八)年	一七校	九〇、二六二人
大学	(学校数)	(在学者数)
一九一八(大正七)年	五校	九、〇四〇人
一九二三(大正十二)年	三一校	三八、七三一人
一九二八(昭和 三)年	四〇校	六一、五〇二人
一九三三(昭和 八)年	四五校	七〇、八九三人

『学制百年史』(文部省)から作成

今回紹介する資料は、『受験と学生』に掲載された「横浜専門学校の観る」(一九三二(昭和七)年二月号掲

『学制百年史』(文部省)から作成

今回紹介する資料は、『受験と学生』に掲載された横浜専門学校に関する記事のうち刊行時期の近い「横浜専門学校を観る」(一九三二(昭和七)年二月号掲

載)と「横浜専門学校の画期的給費制度」(一九三三(昭和八)年十二月号掲載)の二点である。

「横浜専門学校を観る」(資料一)を掲載した二月号は、「入試問題予想号」として刊行されている。目次には、「入試問題の傾向研究と予想」、「英語の出題方針と最後の総準備法」、「全国実専入学難易度の研究」、「懸賞誌上模擬試験問題」、「本年度の各校募集要項」(十二月十七日現在)などが取り上げられ、入試を間近にした読者の関心を誘う内容になっている。

当時の横浜港は、神戸港とともにわが国を代表する貿易港として栄え、市内には商業課程を持つ複数の教育機関が開設された。記者は、「横浜の商業学校戦」として、市内の五専門学校のうち横浜高等商業学校(現、横浜国立大学)、横浜商業専門学校(現、横浜市立大学)、横浜専門学校の創立年、入学状況を比較、新進の横浜専門学校の発展ぶりに学校訪問を思い立つ(ところで、この三校は後に新制大学への昇格を申請するが共に大学名を「横浜大学」としたため本学は「神奈川大学」に変更して審査を受けている)。

そこで、記者は「丘上二帯新開の学校街らしい感じ

がする」ところにあった横浜専門学校を訪問し、米田理事（創立者米田吉盛）と会う。時期は一九三一（昭和六）年の晩秋と思われる。この年は横浜専門学校として初めてとなる第二部第一回卒業式が行われたばかりである。翌一九三二（昭和七）年三月には、第一部第一回卒業式が行われ高等商業科五〇名、貿易科二名の卒業生を送り出している。続く一九三三（昭和八）年十二月には、現在まで続く給費生試験第一回を実施するなど、米田の学校経営が順調にすすんでいることが窺える。

記事中、米田が野球場とトラックについて説明しているが、『神奈川大学60年のあゆみ』（創立60周年写真集発行実行委員会（編）、一九八八年十一月）に掲載の写真「グラウンドから見た校舎全景（昭和8年）」には本部地区西側に野球場や陸上トラックが見える。教室は校地の東側、現在の芝生広場と本館前築山附近に三棟の校舎と事務室等が展開されていた（神奈川大学創立五十周年小史編集委員会（編）『神奈川大学五十年小史』、七三ページ、一九八二年八月）。

なお、在学生の就職の状況は記事とは少々異なり、当時、昭和恐慌の影響から「不景気風の吹きまくる時

期」（『神奈川大学五十年小史』、四〇ページ）であり、「卒業の日までに就職の決定していた学生は、ほとんどいなかった。（中略）「大学は出たけれど」という深刻な就職難の時代が到来していたのである。」（同、四〇―四二ページ）という厳しい状況のなか、横浜専門学校では、「卒業見込者名簿に丁重な依頼状を添へ全国有名会社銀行官庁等へ宛て、既に数百通発送され目下続々発信中であり米田学監も過日中関西九州朝鮮方面まで旅行され」（横浜専門学校雑誌部『横専学報』第八号、一九三一年十一月）て、熱心に就職先の開拓、斡旋を行っていたのである。

記事からは横浜専門学校創立間もない時期の米田の学校経営への強い意欲が伝わってくる。

つぎに「横浜専門学校の画期的給費制度」（資料二）を掲載した十二月号は「海陸 高師 入試直前対策号」として刊行されている。主な目次は、海陸高師入試問題の研究、高師受験直前の対策、入学試験予備問題回答、農教の入試近づく、専検敗北者の手記、最近の入学検定試験問題集などである。同誌の編集室雑誌には「十二月中旬頃になると全国官立高等学校の試験

問題が発表され、一月にはひると今度は専門学校の試験科目が発表される。かうなるといよいよちつとしてゐられない。編集者自身でさへ気がもめる位だから受験生諸君の心情誠に同情に堪へぬものがある。」と書かれており目次に違わぬ緊迫感が漂う。

さて、「給費生試験」は、現在まで続く本学の目玉的な入試制度であるが、見出しに「横浜専門学校の画期的給費制度」とあるように、米田は相当に思い切った制度設計を行っている。

給費生試験に合格した者への給費額は、当時の授業料九三円に対し、年額一〇〇円以上三〇〇円以下と多額であり、なおかつ、「大抵の学校の給費制度はその卒業後に於て何等かの義務附帯条件が加へられてゐるが、本校の給費生は、卒業の暁に於ても学費の返還を要せず又何等の義務も負はせられない」という他校に見られない制度であった。給費生試験の配点は「口頭試験は特に之を重要視し、英語、数学、国語各一〇〇点に対して二〇〇点満点」であり、合計点の四割を口頭試験の配点としてゐることからも、この給費生制度が人物を重視したものであることが窺える。

一九三三（昭和八）年十二月に実施された第一回給

費生試験は定員約三十名に対して、六百有余名の志願者を集めた。給費生制度による入学者からは多くの優れた人材を輩出した。

#### （資料一）

#### 横浜専門学校を観る

記 者

#### ◇横浜の商業学校戦

大東京の玄関口たる横浜市には現在専門学校が五校ある。横浜高等工業学校、横浜高等商業学校、横浜商業専門学校、関東学院、横浜専門学校がこれである。此内横浜高等工業学校を除いて、他の四校は皆高等実業教育を主とする学校である。これは場所柄当然のことと言はねばならぬ。

此の四実業専門学校の内、横浜高商は御承知の通り官立、横浜商業専門は公立、関東学院と横浜専門学校は私立であるが、此の最後の横浜専門学校が、創立日猶浅きにも拘らず著しき発展をなし、官学の横浜高商、伝統を誇る横浜商業専門の牙城に肉薄して少からぬ脅威を与へてゐるは興味

のある事実である。

今横浜高商、横浜商業専門、横浜専門の創立年度を掲げると、

横浜高等商業学校・・・大正十三年

横浜商業専門学校・・・昭和三年

横浜専門学校・・・昭和四年

となるが、横浜商業専門学校はかの有名なY校の専修科の昇格したものであり、実際の創立年度は甚だ古い。

次に三校の最近三箇年の入学状況を対照して見ると、左の通りになる。

#### 昭和四年度

(志願者数) (入学者数)

横浜高商 一、二七三 一五〇

横浜商業専門 三〇三 一〇三

横浜専門学校 二〇七 一〇〇

#### 昭和五年度

(志願者数) (入学者数)

横浜高商 一、〇四八 一五〇

横浜商業専門 二〇〇 九二

横浜専門学校 九六一 二八五

#### 昭和六年度

(志願者数) (入学者数)

横浜高商 九三一 一五〇

横浜商業専門 四三四 一〇〇

横浜専門学校 七二六 二六九

右の成績を見ても、横浜専門の著しき躍進振りが分るであらう。

不況のドン底にあつて、而も最も其の影響を受ける事甚だしかるべき私立実業専門学校が、かくも異常なる發展をなしつゝ、あるには何か大いなる理由がなければならぬ。其の視察の意味で、記者は晩秋の或一日、横浜への所用の序でに同校へ立寄つて見た。

#### ◇横浜専門学校を観る

学校の所在地は横浜市神奈川区六角橋町、市電六角橋終点から左へ約二丁、更に左折して丘上に上ると、自然に校門に到達する。此処は市内と言

つても事實は郊外で、丘上一帯新開の学校街らしい感じがする。普通の住宅にまじつてぼつ／＼立並ぶ洋服屋、文房具店、食堂、喫茶店等々、何処か往年の早稲田田圃を懷はせる。

受付に刺を通じて米田理事に会ひ、歓談数刻の後、校内を見せて戴く。米田氏は「まるで寺子屋です」と謙遜されるが、教室の机や椅子などは立派なものだ。「建物は御覽の通り寺子屋ですが、私の学校は外觀よりも内容主義です。まあ之を見て下さい。」と示されたのは教授名を書き連ねた印刷物だ。多くは商大の教授、高等試験委員等の肩書を有する錚々たる人々で、それに新進の専任教授を配してある。商大教授と高等試験委員で固めてゐるのは、此の学校は貿易科、高等商業科、法学科の三科に分かれてゐるからである。「これだけの教授が各学級少数の生徒を受持つて講義します。そこに却つて寺子屋式教育の効果も生れるわけです。」と、米田氏は大いに得意である。

敷地の総面積は一万余坪。大抵の学校が野球場とトラックとを共通にしてゐるのに、此の学校ではそれを別にしてゐるといふ贅沢さだ。トラック

は野球場に隣して一段低く楕円形に掘り下げ、周囲の土手を見物席にしてある。追て其の土手に工事をして、立派なスタンドを造り上げる予定だといふ。事務所の裏手から此のトラックを越して野球場を見渡した眺めは、何処か大陸的だ。「あの向うに社が見えるでせう。あのあたりまで学校の敷地になつてゐます。」と米田氏の指す方に視線を向けたが、近眼の記者には、その社がはつきり見えない。たゞその広い野球場で、ア式蹴球の選手諸君がダンダラ縞のユニフォームで猛練習をやつてゐるのが見えるばかりだ。

此の学校は運動も中々盛んで、ア式では断然横浜第一ださうだ。野球も前早大監督の市岡氏を監督に迎へてから、メキ／＼強くなり、先頃の日米野球戦に出場した郡司君の如き名選手をも育てゐる。「もう暫くたつたら、高商や高工を負かして見せます」と、米田氏は力んでゐる。

此の学校は毎年、全国数箇所に試験場を設け、なるべく多数の志願者から優良な者を選抜する方針を採つてゐる。だから学生の素質が宜しく、今年三月第一回の卒業生を出す、既にその大半は



就職口が定つてゐるさうだ。之も米田氏の自慢の一つである。本校は最初中区西戸部富士塚に在つたのだが、其後現在の所に移転した。当時は人家も少く、淋しい処だつたが、学校が出来てから急に家が殖え、附近の地代は俄然暴騰したといふ。不況時代にどれもこれも愉快な話だ。記者もつい嬉しい氣持になつて、今後一層の發展を祈りつつ校門を辞した。

## (資料二)

### 横浜専門学校の劃期的給費生制度

#### ◇劃期的給費制度成る

横浜市六角橋所在の横浜専門学校は創立日尚浅いが、貿易科、高等商業科、法学科の三科を擁して、新興の意氣に燃えてゐる。年毎に本校を目指す志願者の増加率は誠に物凄い有様で、昭和八年度に於いては各科を合はせ一千五百名の多きに達してゐる。之は当然官学万能時代の反動として、向学の士がいづれも自己達成への自覺を具象化し

て來た一つの証左とも見ることが出來よう。現在社会―大会社や大銀行等がその学校卒業生を採用するに際しての目標も往時とは著しくその趣を異にしてゐることは注目し得る。学園學力を採用第一条件とした時代から考へると、今時の人物本位主義は誠に驚嘆に価する一大進歩と言ひ得よう。先づ人間を陶冶すること、之が実社会が一般學生に要求する所の声である。「質実剛健の精神を基調とし學理の研鑽に併せて其応用力培養に力め、以て實際的人物を養成するに在り」といふ教育方針に拠つてゐる本校が、この實際的人物にして情操円満なる士を求めてゐることは、極めて時宜に適した行き方である。

本校はこの教育方針の徹底化を更に新たなる方法に依つて計らうとしてゐる。即ち昭和九年度より實現せんとする「奨学会給費制度」が之である。奨学会といふのは本校創立当時よりの施設で、従前も本校學生のために貢献し來つたものであるが、今回更に其事業を拡大して諸君に呼び掛くるわけである。



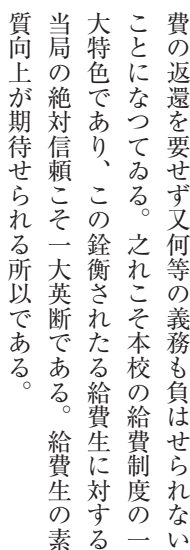
### ◇ 第一回の給費生募集

昭和九年度第一回給費生募集は之を毎年三月より四月に亘つて施行される、普通一般の本校生徒募集と切り離して本年十二月下旬に施行されることになつてゐる。募集人員は各科合計三十名、入学資格は普通専門学校入学有資格者で、在学成績に「第四学年若くは第五学年に於て五分の二以上の成績席次を有する者」といふ制限が附せられてゐる。出願期限は十二月一日より十二月二十日迄、試験科目は国語、数学（代数、平面幾何）、英語（英文和訳、和文英訳）の三科目。但し商業学校卒業者は数学を省き商業簿記、銀行簿記が課せられる。試験は十二月二十四日、二十五日の両日、本校に於て行ふ外、十二月二十四日、二十五日に広島高工、十二月二十五日、二十六日に大阪帝大医学部、十二月二十七日、二十八日に福岡高校、十二月二十八日、二十九日に名古屋高商でも施行することになつてゐる。尚此他に口頭試問及体格検査を夫々行ふが、口頭試問は特に之を重要視し、英、数、国語各一〇〇点に対して二〇〇点

満点となつてゐることは、志願者諸君が前以つて特に注意して置く必要があると思ふ。因みに此給費生入学試験の成績発表は昭和九年一月三十日で、之は受験者各自に其合否及得点数を通知することになつてゐる。得点数の発表は之に依つて学科試験得点一五〇点、口頭試問一三〇点以上と判明すれば、その受験生はたとへ給費生の方は不合格になつても、明春三月の本校一般学生の入学試験に於ては、其無試験検定出願の資格が得られる□である。之も優秀な学生を得る一つの方法として、妥当性が多分に□と言へよう。

### ◇ 給費制度の内容に就て

今回創設された給費生募集に関しては以上で尽きるとおもふが、その給費額は次の通りである。即ち第一種給費生は年額一百円、第二種給費生は年額一百円以上三百円以下となつてゐる。茲に特筆して置きたいことは、大抵の学校の給費制度はその卒業後に於て何等かの義務附帯条件が加へられてゐるが、本校の給費生は卒業の暁に於ても学



(國立國會圖書館藏)

